

吉野川歴史探訪 古地図で見る吉野川 その1

～藩政期の吉野川～

お疲れ様です。別宮川三郎です。11月を迎え秋も深まりつつあります。幸いにして、今年、吉野川で大きな洪水、水害はありませんでした。しかし、これを当たり前と思い油断してはなりません。出水期は終わりましたが、季節外れの大雨、地震津波などの自然災害が発生するかも知れませんが、万全の備えを心がけましょう。

さて、吉野川歴史探訪は、今月号で39回を数えます。これまで、様々な古地図を用いて説明してきました。今回は、それらのうち、吉野川に関わりの深い藩政期に作成された古地図を探訪しましょう。

1. 「阿波淡路両国絵図」から見る370年前の吉野川

現在、私達が見ている吉野川は、雄大で情緒豊かに悠々と流れ、私達に安らぎを与えてくれます。しかし、かつての吉野川は「四国三郎」と呼ばれる暴れ川であり、洪水の度に流路を変え、幾筋にも別れながら徳島平野を勝手気ままに奔流していました。阿波淡路両国絵図(図1)は、その頃の吉野川全体の姿を見ることが出来る代表的な絵図で、正保3年(1646)に作成されたものです。この絵図は「正保の国絵図」といわれ、今日の地形図にあたるものです。

図1 阿波淡路両国絵図【正保3年(1646)】



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館「蜂須賀家文書」より
(ここでは徳島県立文書館所蔵の複製品に新旧河川名などを追記したものを転載しています)

幕府は、慶長・正保・元禄・天保年間の4回にわたって、主な藩に国絵図の調整を命じ、各藩は作成のうえ幕府に提出しました。正保の国絵図には、各村の名前が記され、大凡の川の場所を確認することができます。また、紀伊水道に注ぐ河口の名称から、それらが現在の撫養川、旧吉野川、今切川、吉野川(当時の別宮川)、新町川であることが確認できます。

■国絵図が示す「新川掘り抜き工事」への疑問

阿波淡路両国絵図には、重要な問題が隠されています。というのは、藩政期の吉野川は、第十から北へ流れ現在の旧吉野川・今切川として紀伊水道に注いでおり、徳島城には通じていませんでした。このため、藩は、徳島城の防御、舟運路の確保のため、吉野川の水を引き込むことを決め、1672年(寛文12年)に、第4代藩主蜂須賀綱通は、吉野川と別宮川(現吉野川)をつなぐ、「新川掘り抜き工事」を行いました。このため、その後、別宮川の水量が増えて本流が別宮川に変わったというものであり、第十から下流の吉野川誕生の根拠とされてきたのです(Our よしのがわ VOL.3 参照)。ところが、阿波淡路両国絵図は「新川掘り抜き工事」以前に描かれていますが、絵図には、別宮川が旧吉野川とつながって描かれています。

しかも、第十から下流の河道は現在と殆ど変わっていません。このため、別宮川は、「新川掘り抜き工事」以前から吉野川とつながっていたと理解するほうが自然ではないかという疑問が生じます。また、阿波近古史談(大正年間に徳島日日新報へ連載)においても、「蜂須賀氏が徳島築城後、40年に調整したという地図(阿波淡路両国絵図のこと)を見るに立派な別宮川と言うのがある。してみれば祖母ヶ島から徳島城へ引水のために運河を掘りその運河が拡大して別宮川となった説に疑いがある」と記されています。

このような点から、国絵図が作成された頃の第十付近の吉野川は、平水時には吉野川を流れ北流していましたが、洪水時は低地帯の別宮川へ氾濫が生じていたことが考えられます。

「新川掘り抜き工事」といっても、それは、別宮川を新しく掘り抜く工事ではなく、平水時にも水が流れるよう吉野川と別宮川を繋ぐ、小規模な工事だったと考えるほうが妥当なのでしょう。

■四国三郎、吉野川の名の由来は明らかになっていません

川は、時折、私達を水害により苦しめますが、一方で様々な恩恵を与えてくれます。やがて川は、利用していく長い歴史の間に親しまれ、記憶され、いつの間にか普遍的な一定の呼び名が与えられることになるのだと思います。

「吉野川」の名称の由来はどうでしょうか。三好郡を横断する川ということで「三好川」と称していましたが、「吉野」と転じたのだろうか、川岸がヨシに覆われていたので「よしの川」と言っていたが、その字が雅ではないので現在の字に改まったとか、諸説がありますが、その由来は定かではありません。

また、「四国三郎」という異称も、江戸時代の「本朝俗諺志」という書物に「坂東太郎は刀根川、四国二郎は吉野川、筑紫三郎は筑後川をいう。これ日本三大大河なり」とあります。「本朝俗諺志」の筆者が二郎と三郎を誤って記したのか、二郎と三郎がいつの頃入れ替えられたのかは、現在のところ、明らかになっていません。

2. 精度が高い「^{みょうざい ぐん ぶん けん ぐん す}名西郡分間郡図」

「名西郡分間郡図」(図2)は、文化9年(1812)に藩の絵図師である岡崎三蔵らにより作成された地形図であり、その出来映えは非常に高い水準にあり「地図」に近い「絵図」と言えます。

名西郡は絵図から見て分かるように、大部分を山地が占めます。絵図の左下に残る平野は、吉野川沿川の石井町、上板町付近で、全域と言っていいほど殆どの村で水害に悩まされた土地柄でした。

岡崎三蔵らがこの精密な絵図をどのように作成したのか、[絵図①](#)(P9)で探訪しましょう。

図2 名西郡分間郡図【文化9年(1812)】



林家文書(石井町林家蔵)より

3. 吉野川堤防の原形が描かれた「^{よしの がわ え す}吉野川絵図」

藩政期の吉野川では、各所に小規模な堤防が部分的に築かれていましたが、吉野川の氾濫を治めるような大きな堤防はありませんでした。「吉野川絵図」(図3)は天保11年(1841)に作成されたもので、高畑中須から岩津まで描かれ、堤防がなかった頃の吉野川の様子が理解できます。

詳細は[絵図②](#)(P10)で探訪しましょう。

図3 吉野川絵図【天保11年(1841)】



森文庫資料(徳島県立図書館蔵)より

4. 「八ヶ村堰」の形状が描かれた「^{みょうざい ぐん にし かく えん むら の え す}名西郡西覚円村之絵図」

「名西郡西覚円村之絵図」(図4)は、[絵図①](#)「名西郡分間郡図」と同様に岡崎三蔵らにより文化期に作成された、西覚円村絵図の写しと考えられています。

この絵図の注目すべきところは、絵図の左下に描かれている「八ヶ村堰」です。堰は、吉野川本流と神宮川(現在の神宮入江川)の分流機能を有し、南岸側の安全度を高めていましたが、明治初めの堤防整備により堰は埋められました。

この絵図は当時の堰形状がわかる貴重な資料です。

詳細は、[絵図③](#)(P11)で探訪しましょう。

図4 名西郡西覚円村之絵図
【文化期(1810頃)】



森文庫資料(徳島県立図書館蔵)より

みょうざいぐんぶんけんぐんず
 絵図①名西郡分間郡図 文化9年6月(1812)

林家文書<石井町林家蔵>

1. 絵図の概要

藩の絵図師である岡崎三蔵らにより作成された国絵図作成時の名西郡部分の実測にもとづく測量絵図。文化9年6月(1812)の年号があり、伊能忠敬の日本列島沿岸の測量と同時期に作成されたものです。縮尺は二分一丁^{※1)}となっていることから約18,000分の1と考えられます。

現在の石井町、神山町に加えて入田町(徳島市)と上板町の瀬部・高瀬・高磯・上六条・下六条・佐藤塚が当時の名西郡に属しています。名西郡は絵図から見てわかるように大部分を山地が占めます。残る平地は全域と言っていいほどほとんどの村で水害に悩まされた土地柄でありました。とくに吉野川は網目のように何筋にも川が分派し、凡例で白星として表現されている川原がその状況を物語っています。当時は吉野川に現在のような連続堤防はなく、荒れ放題の流路であったことが想像できます。さらに吉野川が氾濫した際には、南の山に近いところを流れる飯尾川や渡内川周辺に水が流れ、吉野川周辺だけでなく、山際付近まで一帯水害に悩まされた地域でありました。

その一方、地域一帯は藍作の盛んな場所でもあります。洪水がもたらす肥沃な土を利用して藍作を行い、度重なる洪水と共存して生活を送ってきた地域でもあります。

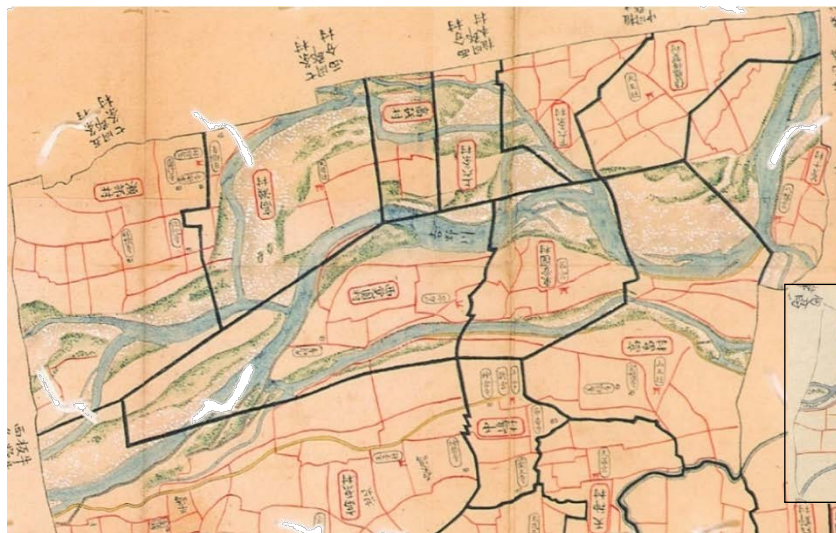
※1) 二分一丁：6ミリメートル/109メートル(一分は約3ミリメートル、一丁は109メートル)

2. 絵図の解説

江戸時代に作成された絵図の多くは、実測結果に基づいていない見取図の類です。江戸時代後半になると測量結果に基づいて描かれる分間絵図が作成されるようになります。「分間」とは縮尺を意味します。江戸時代の実測分間図として有名なのは、文政四年(1821)に完成した伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」です。伊能忠敬の目的は日本列島沿岸の実像を科学的に証明することであり、その結果、沿岸部は詳しいものの、内陸部はほとんど空白のままです。これに対して、岡崎三蔵らの測量は、領内全域をくまなく測量し、精緻な領域図を作成しております。

三蔵は享和二年(1802)に徳島藩より「阿波国図」の作成を命ぜられます。この「国図」編纂にあたっては、紅毛流規矩元法に基づいて実測分間絵図が作成されました。三蔵がとった「阿波国図」編纂の手続きは次のようなものです。まず、阿波国内の藩政村580ヶ村余を一村ずつ測量して、一丁(約109m)の長さを絵図面二寸(約6cm)、すなわち縮尺約1800分の1の「分間村絵図」(村図)を作成します。それから、各村の村図を郡単位にまとめた絵図面二分一丁(約18000分の1)の「郡図」を作成し、さらに郡図を再編集して阿波一国仕立ての絵図面八厘一丁(約45,000分の1)の「国図」を完成させるというものでした。本絵図はこの時の「郡図」にあたります。

岡崎家に残されていた記録には、文化五年(1808)の伊能忠敬による四国測量の際に、三蔵の子宜平が忠敬の測量隊人夫に紛れてその測量技術を観察したとの逸話も伝えられています。そこでは、忠敬らが使用した新式の測量器具に関心が寄せられていますが、その測量術については「格別ノ義モ御座ナク」と報告されており、三蔵らの自負と気概を感じることができます。事実、岡崎三蔵らの測量術・絵図は、伊能忠敬の測量技術と比較して遜色ないものです。分間絵図の出来ばえも高い水準にあり、「地図」に近い「絵図」といえます。



◀ 吉野川付近抜粋
 流路が網目状に枝別れし、
 自由奔放な流れである
 白点部分は川原を意味する

▼ 龍蔵付近(徳島市芝原)は
 名東郡に属するため、
 名東郡分間郡図より抜粋
 龍蔵付近の流路は、
 「村々沼川堰留之図」
 と同様に二又に枝別れする

よしのがわえず
 絵図②吉野川絵図 天保11年11月(1840)

森文庫資料<徳島県立図書館蔵>

1. 絵図のあらまし

天保11年(1840)に岩津(阿波市)から第十村(第十堰)までの吉野川の流路を描いた実測に基づく分間絵図で、現在の地形と重ね合わせても精度が高く、吉野川の変遷がよくわかります。縮尺は一寸百間となっていることから約6,000分の1と考えられます。吉野川中流域に当たる第十堰から岩津の吉野川が詳細に描かれた江戸時代の河川絵図として、これまでの吉野川の歴史を紹介する論考に多々取り上げられてきた絵図です。当時の吉野川の流路の様子や堤防の位置、渡し場などの情報が詳細にわかる貴重な資料です。

青：水流、朱筋：道、薄黄：竹藪、黄筋：堤、墨筋：村郡境、白地面：畠、薄墨：河原の凡例がありますが、絵図作成後に付け加えたと思われる「丑春柳植付 桃色」の追記があり、絵図内に柳を植付ける範囲について反別(面積)とともに桃色で着色されています。

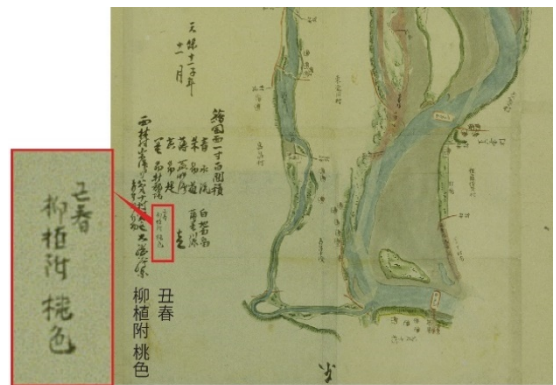
2. 絵図の解説

丑春(来春)、柳を河岸に植え付ける計画図で、吉野川の荒れる流路の固定を目論んで作成されたものと考えられます。桃色で着色された柳植付け箇所は、堤防や河岸に連続して計画され、現地状況を把握して河岸を保護しようとする意図がよくうかがえます。

また、「村々沼川閑留之図」に描かれる工事(寛政期)から約40年を経た天保11年(1840)に作成された図では、龍蔵前の流路が新川筋の一筋になっており、寛政期に行った河川工事の効果がわかります。



<吉野川絵図 龍蔵付近部分>

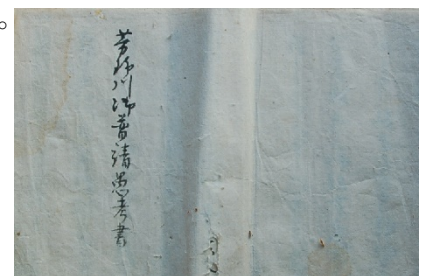


<吉野川絵図 凡例部分抜粋>

■ 吉野川直行論

江戸時代の吉野川は大きな蛇行に加え、枝状に分流を繰り返す、自由な流れを形成していました。このため、洪水時には川岸を崩し、ひどい時には流路を掘り替え、周辺の田畑は川成^{※1)}となり耕作に大きな損害を与え、修繕工事にも莫大な費用が必要とされました。江戸時代後期の天保期にこの状況を改善するため、次のような興味深い計画が提案されています。

天保12年春、「吉野川御普請愚考書」(山田家文書)では、吉野川を岩津から東に海辺まで真直ぐに掘り抜けば、出水毎に川底が掘れ、川の両側に砂を馳せ上げ、自然に堤防の形ができ、そこに竹木や葦などを植え付ければ自然に藪堤が完成します。枝川などの旧流路部には土俵と柳を植え付けることにより、出水時に砂が溜まり、新しく耕作地として土地ができ、年貢の増収も期待できます。本文の一部ですが、治水と土地利用が同時に考えられた画期的な案を提案しています。※1) 川成とは、江戸時代の租税法上の用語。洪水により田畑の土砂が流出し、河原同様となり耕作できなくなること。



<吉野川御普請愚考書表紙>

本図は「吉野川御普請愚考書」作成の前年の天保11年11月に作成され、翌天保12年に柳が植え付けられた範囲がその反別とともに桃色で着色されています。着色された部分は、吉野川の川岸や旧流路部であり「吉野川御普請愚考書」の内容と一致しています。

また、近年発見された桃々軒一貫が作成した「吉野川堀替見取図」は、岩津以東の流路を朱引きで直流化する「吉野川御普請愚考書」と同じ内容が書かれています。吉野川は、明治以降に様々な争いを繰り返す大規模な築堤工事により直流化しましたが、江戸時代すでにこの地域ではこのような画期的な考えがあったことは非常に興味深いものです。

みょうざいぐんにしかくえんむらの え ず
 絵図③ 名 西郡西覚円村之絵図 文化初期頃(1810頃)

森文庫資料<徳島県立図書館蔵>

1. 絵図の概要

「絵図① 名西郡分間郡図」と同様に、岡崎三蔵らにより文化期に作成された西覚円村絵図の写しであると思われます。縮尺は1/1,800。測量の精度が高く現在の地形図と重ね合わせても大きな誤差はありません。寺社や渡し場などが描かれ、当時の西覚円村の状況がよくわかる絵図です。

この絵図において吉野川の本流は「大川筋」、神宮川（現在の神宮入江川）は「小川筋」と表現され、神宮川が吉野川の派流としてとり扱われていました。現在の西覚円には神宮川は埋立てられて川の姿はありませんが、小川筋とされながらも広い河原が存在したことがわかります。

また、神宮川の上流端に堰が描かれています。これが八ヶ村堰です。八ヶ村堰が描かれている絵図は他にも存在しますが、ここまで形状がわかるものはこの絵図以外には確認されていません。

2. 絵図の解説

神宮川は、吉野川の本流さらに江川の一脈を合わせ、東流して西・東覚円の南、高畑の中部を貫流して、国府町芝原に迂回し、第十で吉野川に注いでいました。これも吉野川本流に劣らぬ水勢であったといわれています。この絵図で見られるようにまさにここが神宮川の上流端にあたります。

この藍畑地区の上流、鴨島町知恵島に、藩政期に周辺の十三か村が共同して江川大堰(十三ヶ村堰)を築きました。これは伊澤亀三郎(いさわかめさぶろう)の孫・文三郎の計画・指導によるもので、洪水時に吉野川の水が江川へ押し寄せるのを防ぐためのものだったといわれています。

これに対して、藩政期に高畑、東覚円、西覚円、高川原、加茂野、市楽、桜間、天神の八か村が、神宮入江川の西覚円付近に八ヶ村堰を築きました。長さ九十間(約160メートル)の洗堰(越流堰)だったとされています。吉野川本流の洪水が神宮入江川に流れ込む量を少なくするためにつくられたものでありました。八ヶ村堰の正確な建設年代は不詳ですが、この絵図や「村々沼川堰留之図」にはすでに八ヶ村堰が描かれており、寛政10年(1798)以前には存在していたことがわかります。

また、この絵図を現在の地形図と重ね合わせると、当時の神宮川の流路や八ヶ村堰の位置がわかります。石井河川防災ステーション(四国三郎広場)は、まさに神宮川の上流端及び八ヶ村堰が存在した位置にあたります。古くから水害や水争いに悩まされた原点に、吉野川の水防拠点となる石井河川防災ステーションがあります。



<八ヶ村堰部分詳細>



<現況重ね合わせ図>

次回は、藩政期の村々沼川堰留之図、明治時代の絵図、地図等を探訪しましょう。